

| | |
|------------------|---|
| Title | 三・一ー以降をどう生きるか : 聖書の語りかけに聴く |
| Author(s) | 左近, 豊 |
| Citation | キリスト教と諸学 : 論集, Volume27, 2012.3 : 141-156 |
| URL | http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3901 |
| Rights | |



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

三・一一以降をどう生きるか

——聖書の語りかけに聴く——

左 近 豊

はじめに

三月十一日以降、それぞれの賜物を生かした救援活動、支援活動がなされるなかで、私は聖書の学びへと召された者にとって、今このとき託されている固有の務めは何であるかを自らに問うてまいりました。そのような時に、NHKラジオ第二放送「宗教の時間」担当ディレクターのAさんから重い問いを突きつけられたのです。今回の地震と津波を生き延びた人たちの中に、少なからず生き延びたことを悔い、深い自責の念にとらわれている方たちがおられる。例えば逆巻く怒涛の中で自分が助かるのに精一杯で、ガレキをかき分けて水面に辛うじて顔を上げて息を吸い、生きていることを実感するや、ふと気づけば、いつの間にか娘とつないでいた自分の手に娘の手はなく、以来娘は行方不明。なぜ自分は手を離れたのか、と激しく自分を責める母親に、宗教者は何を、聖書は何を語りますか？ というものでした。私は大いに戸惑い、迷い、苦悩しました。ただ聖書、特に旧約聖書は、この問いから逃げないことを確信しておりましたので、聖書の嘆きの言葉に耳を澄ますことにいたしました。今回は、三・一一

以降を生きる私たちに聖書は何を語りかけるのかを共に聞いてまいりたいと存じます。

三・一 後の嘆きと問い

本論に入る前に、震災後、新聞やテレビを通して多くの人たちの嘆き、そしていくつかの重要な問いかけがありましたので、ご紹介し、それらの声を共有いたしたく存じます。一つ目は**風化と忘却**を危惧する声でした。震災後わずか一か月後に一人のシンガーソングライターが、一九九五年の阪神大震災の経験に基づいて、次のように語っていました。

「最初の三年ほどは私だけでなく、たくさんの方が神戸に歌いに来てくださいました。

でも五年、一〇年とたつにつれて少なくなり、今や東京で「二月十七日だから神戸に帰る」と話をして「法事？」と言われるくらい**忘れ去られています**。でも私は一人くらい伝え続ける人間がいなきゃいけない、忘れられては困る人がいる限り歌い続けたいと思っ**て**いるんです。」(歌手 平松愛理¹⁾。傍線・強調は引用者による。(以下同様)

さらに遡れば、広島、長崎、そしてアウシュヴィッツを生き延びた人たちを何よりも苦しめてきたのが、この忘却と風化の問題であったことも思い起こされます。戦争と災害の違いはありますが、街や民族の崩壊を生き延びた人たちの哀しみの記憶は、等しく忘却と風化に晒され続けてきました。歴史に刻まれた哀しみとして今一度あらた

めて耳を傾けたいと思うのです。忘却は、単に崩壊の体験者が六六年の歲月の中で命の灯火を消していかれたためばかりではありません。そもそも事が起こったその時に、すでに「忘却」と「風化」は始まっていた、と言われています。このことについて、広島・長崎としばしば比べて論じられるアウシュビッツの記憶について、哲学者ハンナ・アーレントという人が「忘却の穴」という概念を用いて語っています^②。強制収容所というのは、誰もがいつ何時落ち込むかもしれない、落ち込んだらかつてこの世に存在したことがなかったかのように消滅してしまうような「忘却の穴」のようなものだった、と言うのです。強制収容所などで殺害が行われた、もしくは誰かが死んだことを教える屍体も墓もない、犯行の痕跡を残さず、犠牲者を生きている人間たちの記憶のなから抹消してしまい、一人の人間がかつてこの世に生きていたことがなかったかのように生者の世界から抹殺してしまうようなものだというのです。徹底的に殺しつくされてしまい、殺された人を追憶する人たちまで殺され、一切が抹消されて記憶から消し去られ、何がそこで本当に起こったのかを伝える人もいなくなり、語る人がいないために「忘却」と「風化」は、既定のことだったと言うのです。「爆心地のなしをつたえてくれる人は、誰もいません」（画家 丸木位里・俊^③）という衝撃的な響きとも呼応します。今私たちは、津波によって根こそぎにされた大槌町や気仙沼、釜石や東松島から同じ響きを聴いているのではないのでしょうか？

重要な問いかけの二つ目は、語り伝える**言葉の限界**、**伝達不可能性**への言及です。特に文学者や詩人など、言葉に敏感な人たちから発せられるのを多く聞きました。

「新しい事態を説明するためのことばを、……持ち合わせていない」（高橋源一郎^④）

「震災直後には、言葉も壊れて押し流されてしまい、感情が真空になっていた。悲観の情熱（パッション）

よって危難と向き合う時」(佐伯一妻)^⑤

「三・一一後の世界であつても有効な言葉を探りたい」「大災害という極限状況での詩の言葉の有効性に、詩人たちは不安と確信を抱いているようだ」^⑥

「時間がたてば日常が戻り、記憶は薄れる。それでも被災地は『三・一一後』を生き抜かなければならない。被災地に寄り添い、失われた言葉を想像し続ける必要がある。それは、この喪失感を表現する言葉を見つげられずにいる、私自身の問題でもある」(新聞記者 武田耕太)^⑦

これも今回に限ることではありません。あまりに悲惨で常識を超えた想像を絶するような出来事は、その内部にいて奇跡的に生き残った人にとつても自分の経験したことが信じられない場合があります。まして言葉にできない場合が多いと聞きます。大田洋子という作家は被爆直後の広島のを巡りながら言うのです。

しかし、なんと広島、原子爆弾投下による死の街こそは、小説に書きにくい素材であろう。それを書くために必要な、新しい描写や表現法は、容易に一人の既成作家の中に見つからない。私は地獄というものを見たことも無いし、仏教のいうそれを認めない。人々は誇張の言葉を見失つて、しきりに地獄と云つたし地獄と云つた。地獄という出来合いの、存在を認められないもの名で、そのもの凄さが表現されえるものならば、簡単であろう。先ず新しい描写の言葉を創らなくては、到底眞実は描き出せなかつた。小説を書く者の文字の既成概念をもつては、描くことの不可能な、その驚愕や恐怖や、鬼気迫る惨状や、遭難死体の量や原子爆弾症の慄然たる有様など、ペンによつて人に伝えることは困難に思えた。^⑧

『夏の花』を書いた原民喜も同様です。⁹⁾ 既存の語彙では、言葉では、文字では言い表せない、あるいはたとえ語りえたとしても理解されえず、伝わらない。そして次第に経験したものにしかわからない、との諦めの中で深い沈黙に閉ざされるといふことが起こったことを重く心に止めたいと思うのです。

的確に表現する言葉が見出せないだけでなく、あえて異常な世界、途方もない出来事について語ったことを誰も信じない、誰も聞く耳を持たない世界で、生き延びたものの言葉は永遠に失われてゆく危機にあった。うまく言葉にできない、表現が見当たらない、そのような思いは、崩壊を生き延びた人たちが、戦後、生活を整え、異常な世界を脱して普通の日常を回復すればするほど強まったと言います。自分たちが経験したことが伝わりづらくなるのを痛感しているのです。「真実であればあるほどますます伝達力を失う」という経験をし、どんなに言葉を尽くして語ろうとしても、きちんと伝わらないもどかしさ、「人間の言葉の世界の外にあるものを言い表そうとする絶望的な試み」に空しさを覚え、ついには自分の真実さを疑うようになり、沈黙へと追いやられる。そうやって「忘却の穴」は深く穿たれ、途方もない出来事がそこに葬られていく、と先ほどのアーレントは語っています。

三つ目の問題は悲哀に関する**思想化の困難**です。忘れられ、伝達する言葉も見出せない中で、哀しみの記憶が深く沈黙の淵に閉ざされてゆけば、(事実は記録されても)哀しみ自体は思想化されることなく、知の地平から没してゆき、次世代以降に継承されてゆく手掛かりを失うのです。

戦後を代表する思想家、丸山真男も久しく沈黙を守った被爆者の一人でした。丸山は一九四五年八月六日に広島、宇品の陸軍船舶司令部で被爆をしています。その体験について二〇年間沈黙を守り続け、その後も限られた場域しか被爆体験を語らなかつたと言われます。その限られた場でなされたインタビューの中で「被爆体験が、思想形

成に意味あるものになっていきますか」との問いかけに「こればかりは、もう無理に意味をでっちあげてもしょうがないことで、やっぱり自分の中にずーっと、こう……発酵させていく。たまつていくものを発酵させる以外に本当のものはできませんから」と途切れ途切れに答え、論理的に思想化するには、余りにもわからない事が多すぎるといふ印象を述べています。そして原爆投下直後の光景を語る場面で「こみ上げてきた」ものに言葉を失つていふのです。別の機会にある広島医師が、被爆者でありながらも、ほとんどそのことが専門研究に反映されていないことにやや不満をこめて丸山に宛てた書簡の中で、「先生の政治思想史へのかかわり方のなかで、原爆は無縁のものだったのでしょうか。(略) 原爆は先生にとって一体なんだったのでしょうか？」と問うたのに対して丸山は、心の琴線に触れたのか、やや感情を荒げるかのように、「わたしは原爆体験をすでに思想化していると思うほど不遜ではありません。小生は『体験』をストレートに出したり、ふりまわすような日本の風土(ナルシズム)が大嫌いです。原爆体験が重ければ重いほどそうです。もしわたしの文章からその意識的抑制を感じ取っていただけならば、あなたにとって縁なき衆生とおぼしめしてください。なお、わたしだけでなく、被爆者はヒロシマを訪れることさえ避けます」と答えています。さらに「広島は戦争の惨禍の一ページに過ぎないものではなく、毎日毎日新しく起こっている。新しくわれわれに向かって突きつけられている問題なんです」とも語っており、思想家が思想化しない問題の深さが見て取れます。

以上の三つの嘆きと問いかけから浮かび上がってくるのは、哀しみを語り伝え、語り継ぐことの困難さです。それは、現在既に直面している問題であると同時に、将来にわたる深刻な問題です。語る側にとどまらず、語られる者、そして語り継がれるべき次の世代の聞く耳とも深く関わっています。恐ろしいこと、悲しいことを聴いても、それが自分の痛みではない、自分の悲しみにならないということがあります。たとえ聞いたその時には心動いても、

いつしか過去のこととしか受け止められないということもあるでしょう。聞いた話があまりに途方もない場合、その異常な世界と、普段生活をしている日常との間に大きなギャップ、深い溝ができてしまつて、そこを越えられない、あるいは越える氣力を失つてしまふ、ということがあるように思うのです。本当はそうであつてはならない、日常にあつて非日常を考え続けるということ、一見平和な毎日の中で、忍び寄る陰に目をこらすこと、それが求められていると思うのです。また、ある重要な経験が局地化してしまつて、時間的にも空間的にも断絶の遙かかなたにあるものとしか受け止められなくなつていくことを感じます。たとえば東京に暮らしている人たちと広島・長崎に生活する人たちの間には、原爆の哀しみに温度差があります。東日本も例外ではありません。これらの隔たりをどう超えてゆくか。聞く側の想像力の貧困、鈍感さ、共感する力の欠如も指摘されます。言葉ではわかつたように思えても、心の底ではわかつていない。さらに悲しいこと、恐ろしいことに敢えて取り組む勇氣と氣力、想像力が湧いてこないということもあるでしょう。聞いたことをどう生かしていくか、応用し、適用してゆくことへと進むことができずにいるのです。

三・一 一以後の課題

以上のような現状の中で、幾つかの示唆を与える次のような言葉にも出会いました。

「震災の犠牲者を通して、幾多の災厄の中で生きた古人たちの心は、あらためてつながることが大切なことかと思われます。」（作家 古井由吉）¹⁾

「災害と戦争とはもちろんちがう。けれどいま、町がガレキの山と化し、大勢の人が家族や家を失い、制御不能に陥った原発と放射線という見えない敵におびえる私たちの気分は戦争モードに近づいていないだろうか。……（中略）……（私は、詩や小説や絵や、美しいコトバなどが手もとになければ、ひからびてゆく気がしていた）」と田辺（聖子）さんは書く。……（中略）……私は文学を、読書を過大評価はしていない。ただ文学にしかできない仕事があるのは事実だし、読書でしか得られない効用があることも知っている。」（文芸評論家 斎藤美奈子^①）

斎藤の言葉を借りるならば「聖書にしかできない仕事がある。聖書からしか得られない慰めがある」、と言い換えることもできるでしょう。

一 聖書が語りかけること

聖書の民は苦難に次ぐ苦難を生き延びてきた人たちです。その中でも最大の試練は、紀元前六世紀に起こったバビロン捕囚だったと言えます。国家も宗教も社会も壊滅した後、さらに深刻であったのは生き残った人々の内なる崩壊でした。自分が生き延びるために、親しい者たちを、愛する者たちを見殺しにした、そうしなければ生き残れなかった。東京大空襲で母親を失った宗左近という詩人が「燃える母」という詩に壮絶な体験をつづっています。原爆後の広島や長崎を生き延びた人たちの相当な数の人たちが、多くの人を見捨て、助けを求める手を振り払って生き延びたことを後に深く悔いています。聖書の哀歌もそうです。生き延びるためにむき出しになった内なる獣のような自分を目の当たりにして激しく恥じるのです。むごいことですが、「わが民の娘の滅びる時には、情深い女た

ちさえも、手ずから自分の子どもを煮て、それを食物とした」(四・一〇)とその時のことを聖書は記しています。

人間が人間でなくなる経験、人間性を失って自分は生き延びた、という自責の念、罪悪感、サバイバーズギルトと言う人もいます。そしてこのような状況を、こんな苦しみを味わせた神とは一体何者か、こんなとんでもないことが起こるのを許した神は何を考えておられるのか、という問いと怒りを抱いたのです。このようにして内なる支えであった信仰が揺らいだことは、いわば人を生きた屍としました。肉体は生き延びても魂は死んでしまった状態です。あまりにシヨッキングな出来事の後、たとえば広島や長崎の原爆による崩壊を生き延びた人たちに見られた心的麻痺状態、サイキックナミングということがありますが、魂も凍てついてしまう霊的麻痺、スピリチュアル・ナミングということもあるのです。

混沌の力に席卷された世界を前にして、もはやこの世の秩序を保ち、われわれを守られるはずの神は沈黙のうちに背後へと退かれたのだ、いやこの現実に対処できる力を持つておられないのだ、いや私たちを見捨てられたのだ、いろいろな思いが交錯するなかで魂が萎えていったのです。危機にもいろいろありますが、魂の危機は聖書の民にとつては致命的でした。多くの人たちがあまりの辛さに魂に鍵をかけて捕囚先では信仰を捨てて実利に生きるようになります。ただ、その中であつて魂の格闘を続けた人たちが少なからずいたことを聖書は証します。そのような徹底して自分たちの体験を掘り下げ、思想化した人たちの言葉が聖書に刻まれ、また聖書を今の形に整える原動力となつたのです。

二 嘆きの表現と神学

旧約聖書「哀歌」には壮絶な葛藤がうかがわれる言葉があります。そこでは破壊の爪痕なまなましい都エルサレ

ムが一人の哀れな人に置き換えられ、擬人化されて深い悲しみが吐露されます。いわれのない激しい暴力に晒され、もてあそばれて道端に打ち捨てられてうめく女性（第一章）や打ちのめされた男性（第三章）の詩で、崩壊後の悲しみと苦しみが祈りとして訴えられます。

聖書の民の祈りには、嘆きを嘆きとして、悲しみを悲しみとして包み隠さず、不平も不満も怒りも不安もすべてをぶつけ、あたかも神の胸ぐらをつかんで、「なぜですか、どうしてですか」と挑みかかるかのように問い続ける信仰が表れています。悲哀、悲しみ、嘆きを、なかつたかのように覆い隠したり、樂觀主義で乗り切ることが聖書の信仰ではないのです。心の奥底にうずく打ち震えるような憎悪、燃えたぎる毒々しい思い、激烈な痛みと怒りも、取り繕ったり気兼ねしたり、感情を押し殺すことなく大胆に祈ってよい、それも祈りなのだということを教えているのです。その祈りの中に見出す新しい真理がありうることを教えるのです。

嘆きの祈りを大事にすることは、決して私たちの霊的生活をさびしくするものではないと思うのです。不信仰なことでもないのです。むしろ大胆な信仰の業と言えるでしょう。嘆きから目をそむけることよりも、悲哀に真剣に向き合うことは、信仰なくしてはできないからです。内なる神への疑念を押し殺して神から目をそむけるよりも、耐えがたい不条理に煮えたる思いを神に向かって訴えることこそ信仰だと教えます。ここで祈りの向かう先におられる神は、順境にあるときに仰いでいたのとは違うみ姿かもしれません。栄光から栄光へ、勝ちてあまりあるよりも、悲しみに嘆きに伴い給う方としておられるのです。高きに鎮座します神であるより、低きに降り、浮世に身を沈め、苦しみを苦しみぬかれ、嘆きを嘆きぬかれる方としておられるのです。

たとえばヨブという人が出てきますが、ある日突然財産も富も、家畜も雇人もすべてを失い、愛し育ててきた最愛の子どもたちを一瞬にして天災で亡くし、悲しみのどん底に突き落とされるのです。さらに自分の体中にひどい

腫物ができてかきむしり、人相も風体も友人たちには最初わからないほどに崩れてしまうのです。何の理由もなく襲いかかった不幸にヨブは苦しみます。苦しんだ末に神の正しさを問うようになるのです。罪もない人間を容赦なく痛めつける神とはどんな神なのか、それで正しい正義の神と言えるのか、全知全能であるならば、この世の不条理、理不尽な苦しみをなぜそのままにされるのか。何の罪もない人間をこんな目にあわせて平気である神は正しいのかをとことん問う。神よ、裁判の席につこうじゃないか、そしてどちらが正しいか決着をつけよう。とまで言うのです。そうやって神の正しさを徹底的に突き詰めながら、これまでとは違うものを発見していく。自分が思っていたものとは別の神と出会っていくことになるのです。

三 嘆きの詩編と共同体

上記のような「哀歌」や嘆きの詩編は、ある天才的な一人の詩人が一個人の経験を言葉にしたものではなく、何世代にもわたって何人もの人々が、共同体が、その時代に特有な数々の経験と悲しみを踏まえて洗練し、推敲し、言い換え、磨き、最もふさわしい表現を模索し、格闘と葛藤を繰り返しながら紡いできた言葉です。沈黙に抗いながら失われゆく言葉を回復するための静謐な戦いの言葉です。慣れ親しんできた世界の廃墟にたたずんで、瓦礫に失われた言葉を探し求め、ついに見出し、携え、脱出する詩人たちの営みが生み出した言葉です。その言葉は、言い表すことのできない圧倒的な苦しみ痛みにある人たちの悲しみに言葉与え、痛みに名を与える助けとなるのです。もちろん私たちの味わう悲劇は、私たちに固有のもので、それを他と同列に扱うことは許されません。他の体験に置き換えて理解することは傷を深めるだけです。アウシュヴィッツの悲劇はアウシュヴィッツに特有のもので、長崎の悲劇は、何をもってしても例えることはできません。そしてこのたびの三月十一日の震災と津波がも

たらしめた傷も他のどの傷とも異なります。そして大きな問題は、その固有な悲しみを表す言葉がないということです。これまで体験したことのないことを表現する語彙を誰しも持ち合わせてはいないからです。今私たちが手にしている表現媒体を駆使してしか前代未聞で未曾有な出来事を把握することはできないのです。

そこでひとつの手段として、苦悩を歌い継いできた人々の詩的表現に素材と示唆を得るという可能性があります。聖書にとどまらず詩というのは、説明の言葉ではなく、隠喩とイマジネーションの言葉です。断片化してしまいがちな経験を表現するには適したもののなのです。それぞれの独自の悲しみを詩編の詩人たちと共有し、その助けを借りて、自らの体験を言葉にし、より意味深いものとして体験し、推敲してゆく可能性が開かれるのです。

もう一つ大事なことは、今の私たちの苦しみの体験を孤立化させない。本来、それは、味わったもの、体験したものにしかわからないものです。言葉にならないものです。けれども旧約聖書に刻まれた嘆きと共鳴することで、個人の苦しみは孤独に終わらず、苦難と救いの歴史を歩んできた聖書の民の苦しみに連ねられてゆく。あてどなくさまよい漂流する悲しみが連綿と連なる潮のうねりのような流れに、それは滅びではなく救いへと向かう歴史にながれてゆくのです。

時空を超えた嘆きの共振れ、とても言いましようか、共鳴によって、ひとつの連綿とした救いに向かう歴史に連なっていく可能性が開かれます。海のように深い傷は、誰にも癒すことができない、と哀歌の詩人は吐露します。聖書はその傷を手軽に癒すなどとは決して言わないのです。むしろ都市崩壊の混沌の中にくずおれ、嘆くものの声に耳を傾けるのです。魂の傷の耐えがたい疼きを負うあなたの傍らでともに泣くものがあることを告げるのです。時間も場所も傷の深さも異なるけれど、ここに深い苦悩に打ちひしがれ、魂から血を汗のように滴らせて祈るものがあることを告げるのです。

現在味わっている嘆きが空しく虚空に響くものではなく、いろいろな時代に、さまざまな場所で発せられた嘆きの祈りと共鳴し合い、時に和音となり、時に不協和音を奏でながらも幾重にも重なり合い、響き合うものとなるのです。今あるこの嘆きが、その人間の苦難の歴史の織り成すハーモニーの中の、かけがえない新たなパートを作りだす。あなたの嘆きそのものに意味がある、というところに向かうものとされているのです。

詩編や哀歌で歌われる詩のほとんどは嘆きで終わらないのです。詩編を大別してみますと、順境の時、逆境の時、そして逆境を経た上での新しい境地において歌われるものに分けられます。そしてこれは旧約聖書の歴史と重なり合うのです。旧約の民は安住の地でこの世界の秩序と調和、知恵の奥義を味わい、順風満帆、順境を喜ぶ時を知っています。けれどもこれまで話してまいりましたような嘆きの淵に沈んで絶望的な滅びの歴史をたどることも多かったです。エジプトを出て荒野野で四〇年間生死をさまよいます。そしてバビロニアでも数十年にわたって故郷を喪失し、民族の存亡の危機をたどります。まさに逆風に身を晒して逆境を生きる。身も心も傷つき、滅びの淵にたたずむ時をたどったのです。ところが、一転 感謝や賛美の言葉へと変わり、約束の地、新しい故郷、新しい天と地を仰ぎ、おぼろげにはありますが希望をはるかに望み見る経験へと昇華されてゆく、それまで想像もできないような新しい境地に達する時をも言葉にしているのです。

四 嘆きの詩編と礼拝

嘆きが一転、感謝や賛美の言葉に変わるというのは、たとえば主イエスが十字架の上で口にされた詩二二編が挙げられます。二二節から二三節の間でガラリとトーンが変わっています。まるで別人が歌っているかのように。一人の詩人が続けて詠んでいるとすれば、その変化はやや異常なほどです。また共同体で共に詠んでいるにしても

違和感を感じざるを得ない変化と言えるでしょう。嘆きから讚美へと変えられる、この調子の変化には、何かが起こっていると考えられないのです。それはもちろん詩人の心境の変化があつて、散々嘆いているうちにグリーンフワークでもそうですが、悲しみを口に出しているうちに癒されてゆき、次第に調子が変わつてくるという、内面的変化の表れとすることもできます。ただ、もっと可能性が高いのは、より目に見える形での一つの変化の可能性です。

詩編の祈りが、どこでなされてきたかを思い起こしていただきたいのです。それは礼拝の中で用いられてきました。礼拝において私たちが経験することがこの詩にも反映されていると考えられることができます。モーヴィンケルという旧約学者が明らかにしたことですが、旧約の民は、祭儀において詩編を編み、それを練り、用いてきたと言われます。日常でのさまざまな悲しみや困難、罪の縄目からめとられながら礼拝に集い、神の前に罪を告白し、あるいは苦悩を吐露し、嘆きを訴えます。その時に嘆きの詩編にあるような、神に向かつて呼ばわり、さまざまな表象やイメージを用いて苦難を描写し、神にこの苦境に介入してくださいを願います。そして祭儀や礼拝の中ほどで、ある大事なことが起こります。それは何でしょう。そうです。神の言葉がその權威を委ねられた祭司や長老によつて語られるのです。多くの場合、それは救済託宣とよばれる神の救いの宣言です。「恐れるな、おののくな、わたしはあなたと共にいて、あなたを助ける」といった言葉です。(エレミヤ三〇・一〇—一一、イザヤ四一・八—一三、四三・一一—一七)。み言葉をいただいた人々はもはや以前のようにではなく、救いの約束に満たされ、恵みに生かされるものとなつて、伏せていた目を上げ、涙を振り払つて神を称えるものとされる。そこに嘆きから讚美への劇的な変化が生じる、という理解です。この様子を記した箇所は残念ながら聖書の中には出てきません。ただ出てこないから無い、とは言えません。言わずもがなのこと、誰もがよく知つて、なじんでいることはあえて言

わないということもあります。ただし、一つ、これに類する出来事を記した物語はあるのです。サムエル記上第一章一二節以下なのですが、あのハンナの祈りの場面です。

嘆きから讚美へ、という変化は、私たちの礼拝体験、あるいは信仰的歩みにおいても経験することかもしれません。礼拝において語られる神の言葉によつて、私たちは罪を赦され、救いの確証を与えられ、死と罪を突破する復活の希望を与えられ、「もはや前のようではない」「命に生きる者とされて押し出されてゆくからです。詩編には、そのようなダイナミックな動きがうかがわれるのです。

まとめ

旧約聖書は、それぞれの土地で、それぞれの時代の言葉で、悲しみを語り伝え、悲しみを直視する共同体を形成してきました。三・一一以後を生きる私たちは、幾多の時代の荒波にもまれ、磨かれてきた詩人たちの悲しみの表現、祈りに導かれ、嘆きに教えられながら、それぞれの悲しみのプロセスを詩人たちと共有し、その助けを借りてより意味深いものとして体験し、推敲し、言葉にし、継承し、悲しみの共同体を形成してゆく可能性を旧約聖書の中に新たに見出すことができるのではないのでしょうか。

(二〇一一年六月二十九日、「教会と聖学院との懇談会」講演)

注

- (1) 二〇一一年四月一三日 朝日新聞「生きていくあなたへ」
- (2) ハナ・アーレント『全体主義の起源』（大久保和郎・大島かおり訳、みすず書房、一九七四年）、二三四―二三五頁。
- (3) 丸木位里・丸木俊作『原爆絵物語 ヒカドン』（ろぼのみみ舎、二〇〇一年、頁番号なし）。
- (4) 二〇一一年四月二八日 朝日新聞『論壇時評』欄「震災とことば」
- (5) 二〇一一年五月二日 朝日新聞文化欄「佐伯一麦↓古井由吉往復書簡」
- (6) 二〇一一年五月一〇日 朝日新聞文化欄「三・一一後の言葉を探す 高橋睦郎ら詩人朗読会」
- (7) 二〇一一年四月一三日 朝日新聞「三・一一記者有論 失われた言葉 想像し続ける力がほしい」
- (8) 大田洋子『屍の街・半人間』（講談社、一九九五年）、二七三頁。
- (9) 原民喜『夏の花・心願の国』（新潮社、一九七三年）、一三九―一四〇頁。
- (10) 丸山眞男「二十四年目に語る被爆体験」、「丸山眞男往復書簡——原爆体験をめぐって」『丸山眞男手帖6』（一九九八年）、一―三三頁参照。
- (11) 二〇一一年四月一八日 朝日新聞文化欄「古井由吉↓佐伯一麦往復書簡」
- (12) 二〇一一年三月二九日 朝日新聞文芸時評「本にできること」